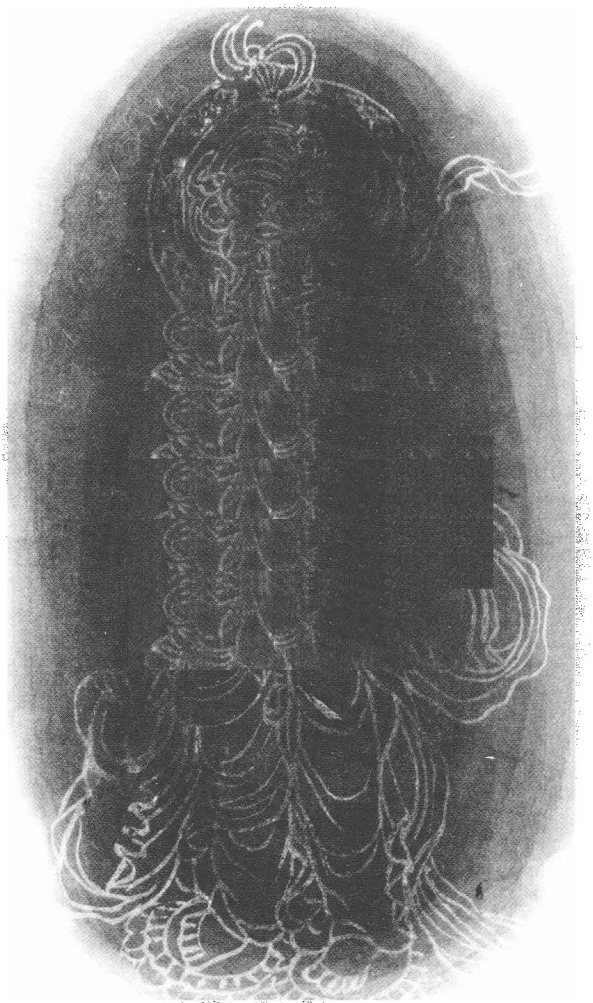
燈籠の天人

乾谷敦子

燈籠の天人

乾谷敦子



東都書房

913 (N.D.C.)

乾谷　敦子

燈籠の天人

乾谷敦子著

東都書房　昭和45

208 p　21 cm

© A. INUIYA
Printed in Japan

昭和四十五年二月二十五日発行

著者　乾谷敦子
発行者　佐藤鐵男

東京都文京区音羽二―十二―二十一
（郵便番号一一二）
東都書房

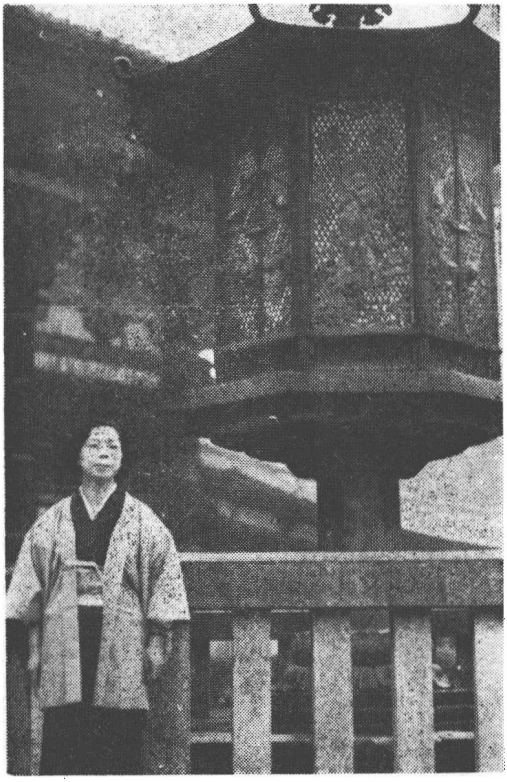
電話・東京(942)一一一一番
振替・東京七一七三二番
印刷　星野精版印刷株式会社
製本　藤沢製本株式会社

定価 540円

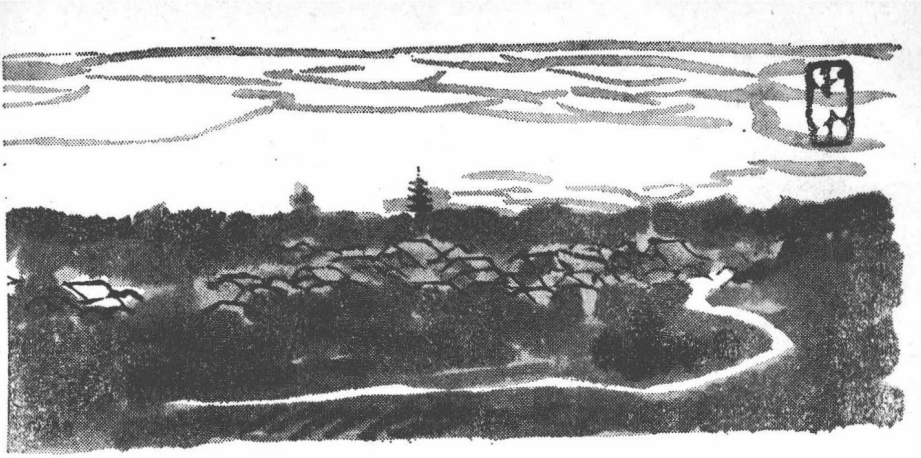
まんいち落丁・乱丁の際は，おとりかえいたします。

8093-705563-5194(0)

天女さまは　ふえをふきながら——
小はぎたちのゆくえを
母が案じていた昼も
権太がいくさに出ていった朝も
平太が火の海で母をよんだ夜も
三次の命ごいに
ちぐさがなみだぐんだ夕ぐれも
やさしいひとみで
立っておられた



（東大寺の銅燈籠と著者）



もくじ

第一部

ひみつのあき小屋……7
夜にげ……26
東大寺の荘園……38
和歌の前と小はぎ……56
宇治の合戦……68
山賊のてつだい……81
南都の焼きうち……91

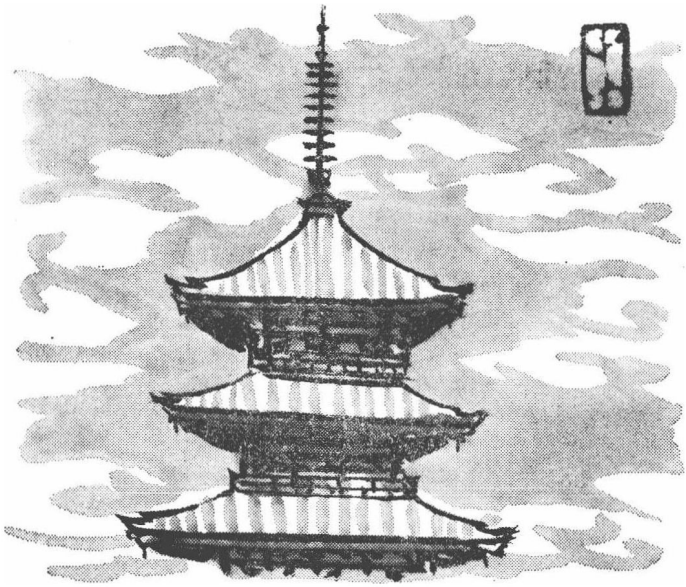
第二部

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

めぐりあい……109
おとろえゆく平家……120
再建に立ちあがる人々……132
わかれのかなしみ……145
わるいなかま……154
東国のさむらいたち……168
なかまの命ごい……181
あたらしい門出……194
あとがき……204

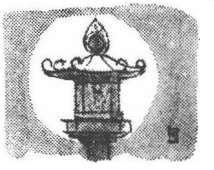
装幀・さし絵　木俣清史

燈籠(とうろう)の天人(てんにん)



第一部

序章



奈良の東大寺大仏殿の正面、回廊にかこまれた広い前庭のまん中にひとつの大きな銅燈籠がある。八角形でたけは五メートルぐらい。そばへよると見あげるほど高いけれど、はなれてながめると、壮大な大仏殿によくつりあっている。

貧者の一燈、長者の万燈というように、仏さまにそなえるあかりは、むかしからたいせつにされた。この燈籠も、大仏さまのみあかしとして、古い奈良朝時代（七二四～七八〇年）にたてられたものであった。

燈をいれる八角形の部分は、八方がななめごうしのとびらになっていて、ししや、から草や天人のもようが、うきぼりにされている。天人は、それぞれちがった楽器をかなでているが、なかでも横ぶえをふいている天女の美しさ――花にかざられたかみ、ふっくらしたほお、微笑をふくんだ切れながの目、そよ風になびいているころものはしばし――そのやさしいすがたが、治承四年春（いまから七百九

十年ほど前）のひるさがり、けぶりわたった光の中で、ゆめのようにうきあがっていた。

そのすがたを、さっきからじっと見あげてたたずんでいる、ひとりの女があった。小じわのめだつあさぐろい顔、そまつな着物に身をつつみ、足もとには草とりかごがおいてある。つまりこの前庭をそうじしている寺の女のひとりだった。女は、まぶしい日かげを片手でさえぎりながら、かすかにまゆをよせて、くいいるように天女の顔に見入っていた。

「おっかあ。」

ふいに、かたをたたかれて、女はふりかえった。

そこに、ころもを着てはいるものの、見るからにうでっぷしの強そうなわかものが、ひげづらに白い歯をむき出して立っていた。ふだんは下働きで、み仏に花をそなえてまわったりしているが、寺に関係のあるけんかやそうどうときけば、なぎなたかついで飛んでいく。ときには集団で京の都までもおしかけ、南都の僧兵とおそれられている連中のひとりだった。

「権太か。」

母親はほっとしたように、むすこに目をうつした。

「なにを見てござったか、あててみようか。」

権太は燈籠の天人を指さして、

「この天女さまのお顔が、小はぎに似ておると、思うてじゃろう。」

「おお！」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

母親は目をみはって、権太を見た。

「おまえも、そう思うていたのかえ。」

「うん。ずっともう前からじゃ。ここを通るたびに、そう思うては見る。見れば見るほど、似ておるのう。」

母親はあらためて目をこらしながら、

「わかれてから、もう三年たった。小はぎも平太も、生きているのだろうか。」

「生きているとも。それもそう遠くへはいっておらぬにちがいない。」

「そう思いたいがのう。どこで、どんな苦労しておることやら。

のう、権太。母はいつでも仏さまにおねがいしているのじゃ。めぐり会えんでも、せめてみなが無事で生きておりますようにとな。さしあたり、たよりはおまえひとりじゃ。事があっても、むちゃなあばれようはせんでおくれ。」

「それはようわかっている。だがなんというても、わしらはこの大寺の威光を負うているのじゃ。東大寺は天平（七二九～七四八年）のむかし、天子さまが国をしずめるためにと建てられた寺じゃそうな。日本一、位の高い寺じゃ。この寺に手向かえるものは、いないはずじゃ。日本一のこの寺の、大ぜいの堂衆の中でも、この権太ほどに強い弓ひけるものは、かぞえるほどしかいないわ。おっかあ、なにも案じることはない。わっはっは。」

権太はそらしたむな板をたたいて、高わらいした。しかし母親は、そんなむすこを、たのもしそう

にまた不安そうに見あげた。
「それでも、おまえ……。」
「あはは、おっかあはまだ、ふるさとで、受領さまのいいなりになってたころの弱気がぬけぬのう。この東大寺へはいりこんだからには、びくびくすることはないぜ。」
「仏さまが守ってくださろうかの。」
「そうとも。ここの仏さまにゃ、朝廷のご威光がついてるでのう。」

権太・小はぎ・平太の兄弟は、伊賀の山おくの百姓の子だった。その里は、ある貴族の荘園だったが、そこをおさめている受領がひどくよくばりで、百姓からなにもかも取りあげるのだった。父親がはやり病でころり死んでから、権太ら兄弟の身の上に、いろいろなことがおこってきた。

ひみつのあき小屋

それより四年前の秋だった。

みじかい日ざしに、谷間がそろそろかげりはじめるころ、石のむき出ただらだら山道を、小さい平太がたったひとりでおりてきた。かみはぼうぼう、すりきれた着物のすそに、草の実をいっぱいつけた平太は、はちきれそうにふくらんだふところを、両手でしっかりとおさえていた。つまんだような口もとをとんがらせ、見はった目の玉をきょろきょろさせながら、谷の出口の小さな田んぼまできて、立ちどまった。ここらのいねはとうにかりとられて、くろ（田畑のあぜのこと）にはたでやみそはぎの細かい花がさいている。そのくろの上にたっている小屋に、平太の目がとまったのだ。

「あそこならええ。」

もう一ぺん、ようくあたりを見まわしてから、平太は小屋の方へのぼっていった。

小屋は、あき屋だった。のきばたにとどくほどすすきのほがのび、うしろの山からはってきたくずの太いつるが、入り口をよこぎっている。あき屋になってから、もうかなりたつ。ここにいた人たちは、にげたのだった。

そんなことは、ちょいちょいあるのだ。日あたりのすくない山間で、寒さの早くくるこの里では、田畑の作物もじゅうぶんとれないのに、年貢の取り立てがきついから、百姓のくらしは苦しい。やりきれなくなると、どこかへにげ出す。

ところで平太は、もう一ぺんあたりを見まわしてから、うす暗いあき屋の中へはいっていった。

かたい土間のまん中の、ひえきったろばたにすわると、おさえてきたふところを開いた。バラバラと、山ぐりの実がこぼれ出した。こんもり山につもるほどあった。小つぶだけれど、ころころとよく実のはいった、うまそうな山ぐり。平太はさっそく一つぶつかんで、糸切り歯で上皮をむしりとると、のびて黒くなったつまさきでしぶをとり、ぽいと口にほうりこんだ。カリカリとかみくだくと、ちちのようにまったりしたしるがにじんで出る。

ポリポリ　ポリポリ　ポリポリ。

たてつづけに十いくつもかじると、やっと平太はおちついた。それから残りのくりを、あかじみた小さい手で、すくうてはこぼし、すくうてはこぼし、しばらくそのつるつるとかたい手ざわりをたのしんでいた。

「みな、おれのもんじゃ。」

それから、ちょうど目のとどくところに落ちていた、もえのこりらしい棒ぎれをひろうと、かたまっているいろりの灰を、けんめいにほじくりはじめた。そうとうほねのおれる仕事だった。

それでもどうやら残りのくりのかさぐらいのあなをほりあげた。指さきがしびれるようにいたかっ

た。平太はあわてて残りのくりをぜんぶそこへうめこむと、その上を力を入れてふみかためた。

「だれにもとられんぞ、もう。」

平太はやっと安心したようにひとりごとをいうと、たれかけていた鼻じるを思いきりすすりあげた。平太がこんな念入りのかくしごとをするのも、わけがあった。

つい三日前、平太はせっかくふところいっぱいひろって帰ったくりを、そっくりよこどりされてしまったからだ。よこどりしたのは、受領さまである。

「受領さまが都へのみやげにされるから、山ぐりを一かごずつさし出すように。」

郡司さまの下役人が、そういって集めまわったのだ。受領さまのいいつけではどうすることもできない。だまってわたしはしたものの、平太はほんとにくやしかった。小さい声で、

「受領さま、くりがほしけりゃ、自分で山へいってひろうたらええのに……。」

というたら、姉の小はぎがくすっとわらった。

「平太、受領さまの前へいって、そういうてみな。」

平太はぶすっとふくれて、横を向いた。すると雨がふりだした。

「雨がやんだら、またひろうてくるわい。」

そしてきょういってみたのだが、だれもかれもが、ひろいまわったからだろう。さんざ歩きまわって、やっと、がけへのびたえだをみつけた。こわごわその下をはいずりまわって、これだけひろったのだ。このだいじなくりは、だれにもとられるもんか。兄や姉にはやりたい。じまんもしたい。けれ

ど家へもって帰るのは、やっぱり心配だった。いつまた、「くりをもうすこし出せ。」とぐるかもしれない。そこで山道をくだりながらいっしょうけんめいかくし場所を考えたすえに、このあき屋をみつけたわけだった。

ここなら、だれもこないこと受け合いだ。雨にもぬれない。ええところをみつけたもんだと、平太はうきうきしていた。もういちど灰の上をポンポンとふんでから、うす暗い小屋を出ていこうとしたときである。なにか、すみで、ちかっと光ったように思えて、立ちどまった。すると、暗さになれていた目が、すぐみょうなものに気づいた。一本の柱の根もとに、石がつみかさねてあるのだ。

すかすようにながめていると、またちかり。たしかにその光は、つんである石のすきまから出ているのだ。そこにも、なにか、かくしてあるらしい。

平太がどきんとしたのは、自分よりさきに、もうだれかがここをかくし場所に使っているらしいことだった。そんなら、そのだれかがきて、おれのうめたくりもみつけよるかもしれん。

そわそわしてきた平太は、いきなりそのつみ石に近よると、いちばん上の、自分のむねくらいの高さの石をかかえこんだ。それは平太にはなかなかの重さだったが、とにかくがんばってかかえおろした。とたんに、ガタンとたおれたものがある。石と柱とのあいだに、たてかけてあったらしい。そしてたおれたものが、石の根もとから、そのすがたを半分あらわした。それをちらと目にしたときの、平太のおどろき！

きもをひやすというのは、こんな気持ちにちがいない。はらの底に、突然氷のかたまりでもおしこ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com